投稿　平家星・源氏星の記録者—香田寿男氏

北尾浩一（星の伝承研究室）

1. はじめに

プラネタリウム投影等で星の和名を取り上げるとき、安易に星座の案内書等から引用するのではなく、伝承内容について理解し確認することを忘れてはならない。

私が、星の和名という世界を初めて知ったのは、60 年近く前の神戸の農業会館で開催された東亜天文学会総会での桑原昭二先生の研究発表であった。当初は、天文計算や彗星、流星に取り組んでいたが、約 50 年前、星の和名に関心を持ち、調査について桑原昭二先生から指導いただいた。桑原先生は、話者が数人いるところで話を聞くとき、そのなかでいちばん力のある人が答え、正しい伝承を伝えている話者が遠慮して話せないから注意するようにと教えてくれた。

世代をこえて暮らしのなかで形成され伝承された和名伝承は、集落で力のあるボスのような人は意外に伝えていない。ほんとうの伝承を伝えている人に語ってもらうことは、簡単でなかった。

星の和名ひとつひとつに暮らしとの多様なかかわりがあり、単にこの星を和名で〇〇と言います、で済ましてしまってはいけない。私は、上州の暮らしのなかの星を訪ねて歩き、また、佐渡、能登半島、瀬戸内海と歩いた。1970 年代、1980 年代は、明治生まれの話者がたくさんいた。徳蔵のネノホシ（北極星の動き）の伝承の多様性にも注目して歩いた。話者の語る伝承内容は、実に多様で豊かなものであった。

星との暮らしの現場とともに、野尻抱影先生著『日本の星』『日本星名辞典』に星の和名を報告している調査者を訪ねて伝承内容について確認したいと思い、平家星・源氏星の香田まゆみ氏、帆かけ星の金田伊三吉氏、ゲンゴロウボシの辻村精介氏、ゲンスケボシの岸田定雄氏、イカ釣りの役星の石橋正氏…と訪ねた。

本稿は、伝承内容と異なる形で広く天文書に書かれてしまった「平家星・源氏星」の真実を明らかにするために香田寿男氏を訪ねた記録である。

2. 『日本の星』『日本星名辞典』『星三百六十五夜』に掲載されている平家星・源氏星

2.1 『日本の星』の事例

野尻抱影先生著『日本の星』（1957 年）には、揖斐郡横藏村の香田まゆみ氏からの「平家星、源氏星」の報告（昭和 25 年の末）について、次のように記されている。

「村の古老に尋ねると、爐の灰の上にシダの葉柄で、三つ星とα・βとを示すような圖を描いて説明してくれました。子供の時からいいなれた名だということで、ただし説明は、右が平家星、左が源氏星とあべこべでした」

「ふたありとも、おっきいお人じゃ」

「この他にも、同じ名をおじいさんから聞いたという子供が二、三人おります。源平の美濃合戦以來、源平（白・赤）の観念がしみこんでいるのでしょう。揖斐の山村には、當村を初め、自稱平氏の落人部落がいくつもあります」[1]

野尻先生への報告で、「源平（白・赤）の観念がしみこんでいるのでしょう」と記して、あべこべでなく白色が源氏、赤色が平家と理解しようとしていた。

野尻先生も、「あべこべ」という伝承内容について、なぜあべこべなのかを論じるのではなく、あべこべでない平家星＝ベテルギウス、

源氏星＝リゲルという解釈をして、次のように記した。

「この方言のすばらしさは、α（ベテルギュース）の赤い色と、β（リゲル）の青白い色との著しい對照を、平家の赤旗、源氏の白旗に見たてたことで、農民の眼のたしかさには感心させられた」[2]

2.2　『日本星名辞典』の事例

野尻抱影先生著『日本星名辞典』には、「香田まゆみ」ではなく、「香田寿男」と記されていた。野尻先生は、香田寿男氏からの手紙を次のように引用している。

「村の古老に尋ねると、炉の灰の上にシダの葉柄で、三つ星とα・βを示す図を描いて説明してくれました。子供の時からいいなれた名だということで、ただし説明は、右が平家星、左が源氏星とあべこべでした。この他にも同じ名を（家の）おじいさんから聞いたという子供が二、三人おります。源平の美濃合戦以来、源平（白・赤）の観念がしみこんでいるのでしょう。揖斐の山村は、当村を初め、自称平家の落人部落がいくつもあります」[3]

手紙の引用のあとに、野尻先生は、「農民が星の色をここまで見わけていた眼のたしかさは想像以上である」と記している。『日本星名辞典』においても、「あべこべ」という伝承内容について論じるのではなく、平家星＝赤色のベテルギウス、源氏星＝青白色の源氏星と見わける目の確かさを記している。

2.3　『星三百六十五夜』の事例

野尻抱影先生著『星三百六十五夜』においては、香田氏の名前も平家星、源氏星をあべこべに語った話者の記録も明記せずに次のように記していた。

「ベテルギュースは巨人オリオンの『腋の下』、リゲルは同じく「左足」の意味だが、私は西美濃の山民が色によって平家星、源氏星と呼びわけてゐるのに感心してゐる」[4]

2.4　事例の比較

『日本の星』『日本星名辞典』『星三百六十五夜』の事例を表にして比較する。（表１）

表１　平家星、源氏星についての記述の比較

	日本の星	日本星名辞典	星三百六十五夜
発行年	1957 年	1973 年	1955 年
和名の報告者	香田まゆみ	香田寿男	————
「あべこべである」という明記の有無。	「あべこべでした」と明記あり。	「あべこべでした」と明記あり。	「あべこべでした」と明記なし。
伝承内容と異なる記述内容。（平家星：ベテルギウス、源氏星：リゲル）	この方言のすばらしさは、α（ベテルギュース）の赤い色と、β（リゲル）の青白い色との著しい對照を、平家の赤旗、源氏の白旗に見たてたこと。	農民が星の色をここまで見わけていた眼のたしかさは想像以上である。	西美濃の山民が色によって平家星、源氏星と呼びわけてゐるのに感心してゐる。

平家の旗は赤色であり、ベテルギウスは平家星、源氏の旗は白色であり、リゲルは源氏星と思われがちであるが、伝承内容は、平家星はリゲル、源氏星はベテルギウスとあべこべであった。表１より次のことが言える。

・『星三百六十五夜』には、あべこべであるという伝承内容を記していない。

・『日本の星』『日本星名辞典』には、「あべこべだった」(平家星はベテルギウスでなくリゲル、源氏星はリゲルでなくベテルギウス）という香田まゆみ氏（『日本の星』)、香田寿男氏（『日本星名辞典』）の記録した伝承内容が掲

載されている。

・『日本の星』『日本星名辞典』には、あべこべだったという伝承内容を記した後に、「この方言のすばらしさは、α（ベテルギュース）の赤い色と、β（リゲル）の青白い色との著しい對照を、平家の赤旗、源氏の白旗に見たてたことで、農民の眼のたしかさには感心させられた」（『日本の星』）「農民が星の色をここまで見わけていた眼のたしかさは想像以上である」（『日本星名辞典』）というように、あべこべでない形で記している。

・和名の報告者が、香田まゆみ（『日本の星』）、香田寿男（『日本星名辞典』）と異なる。

※　　※

あべこべだという伝承内容と同時に、平家星＝ベテルギウス、源氏星＝リゲルと見わけた眼の確かさは想像以上と書かれたこと、『星三百六十五夜』には、あべこべだという伝承内容が記されていないことが原因となって、後にあべこべでない平家星＝ベテルギウス、源氏星＝リゲルと多くの本に書かれることとなる。

3. 山本一清先生の事例

松岡義一氏は、山本一清先生の著書に「源氏星」「平家星」が掲載されていると教えてくれた。山本一清先生著『星座の親しみ』には、リゲル、ベテルギウスについて、次のような記述がある。

「自分は此の兩星をそれぞれ『源氏星』、『平家星』と呼ぶことにしてゐる」[5]

伝承という形態というよりも、山本一清先生の発想でそのように呼んだ可能性を考えている。

4. 増田正之氏の事例

増田正之氏は、富山県高岡市で、ヘイケボシ（ベテルギウス）、ゲンジボシ（リゲル）と記録している。[6]　1985 年に行なった富山県高岡市の伏木小学校 6 年生へのアンケート調査によるものである。増田氏のケースは逆になっていないが、増田氏が直接伝承者に確認しているかどうか不明である。伝承という形態ではなく、本等による知識である可能性はないだろうか。筆者（北尾）も、話者から鼓星という和名を記録した際、和名を誰から聞いたか、年輩の人からかと尋ねると書籍からという答えが返ってきた事例があった。

5. 香田寿男氏を訪ねて

5.1　揖斐川中学の香田先生との出会い

1982 年 3 月、私は、東京浜松町の世界貿易センタービルで仕事をしていた。仕事が終わると大垣夜行という普通電車に乗って岐阜へ向かった。

東京を 23 時半頃に出発して岐阜には朝 8 時前に到着した記憶だ。谷汲村、横藏村ともに揖斐川町になっていたので、揖斐川町教育委員会を訪ねることにした。

まずは、教育委員会で目的を話す。野尻抱影氏著『日本の星』を教育委員会で見せて、香田まゆみ先生はおられますか、と尋ねる。教育委員会の人は名簿を見たがいなかった。続いて、野尻抱影氏著『日本星名辞典』を見せて、香田寿男先生はおられますか、と尋ねる。揖斐川中学で理科と技術の教員をされていた。教育委員会の人が電話をしてくれると、すぐ来なさいとの返事。揖斐川中学に歩いて向かった。

5.2　平家星、源氏星の伝承内容を尋ねる

香田寿男氏から揖斐川中学の理科教室で話を聞く。(図 1)

「『大きい人がいる。大きい人が出とんのさ』という言い方ですかね…」

香田寿男氏は、明るい星を「大きい人」、暗い星を「小さい人」と呼んだと教えてくださった。

まず最初に、『日本の星』では、「香田まゆみ」、『日本星名辞典』では、「香田寿男」と異なっていることについて聞く。

「あのね、あの頃は、ひじょうに顔がよかったものでね、香田先生、女みたいんだと、よく言ったんですよ。それで『まゆみ』でやりました」

『日本の星』は、「香田まゆみ」で掲載された。ところが…

「野尻先生から、『君の本名はなんというんですか』と言われ、ばれましたか、というんでね…」

「香田まゆみ」という名前が疑われた原因を尋ねると、「いろいろありますよ。それはいろんな話をするでしょ。それで、脱線して兵隊の話が出てくるでしょ」という答えが返ってきた。

そして、『日本星名辞典』は、本名「香田寿男」で掲載されることになる。

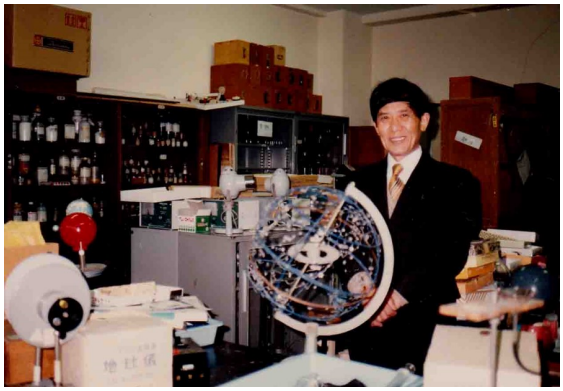

図 1 揖斐川中学理科室にて　香田寿男氏

香田寿男氏に源氏星と平家星について尋ねる。私は、源氏星がベテルギウス（赤）、平家星がリゲル（青白）とあべこべになった理由については、次の 2 つの可能性を考えた。

・話者の記憶が定かでない。

・自分たちが平家と知られたくないためにあえて反対に伝承された。

香田寿男氏は、岐阜県揖斐郡横藏村（現　揖斐川町）で、当時（1956 年頃）（筆者注：香田寿男氏は 1956 年と語ったが、1955 年発行の『星三百六十五夜』に掲載されていることから、実際はもう少し前。『日本の星』によると昭和 25 年）60 歳ぐらいの老人から指で、はっきりと星を指されて教えられたものであり、西美濃では、「赤は源氏の色」と広く伝えられていることがわかった。単に一人の話者の記憶違いではなかったのである。

念のため後に手紙でも再度確認すると、「わざと反対に伝承するというのは面白いご指摘で、もとはそうしたものであったかとも思います」と、香田氏は書いておられた。

元十島村歴史民俗資料館長福澄孝博氏によると、トカラ列島では、平家の落人であると疑われないために、あえて源氏に縁のある「日高」という姓を名乗ったと伝承されている。「わざと反対に伝承する」に通ずる。

ところで、香田氏によると、「源氏星」と「平家星」の名前があまりにも出来すぎているというので、当初、野尻先生は警戒され、香田氏との手紙のやりとりが四桁になって信用していただけるようになったというエピソードがある。

5.3　あべこべである伝承が忘れられる

『日本の星』『日本の星名辞典』で、あべこべと書かれたものの、そのあべこべである伝承内容の重要性が理解されず、結果として、農民、山民の赤色のベテルギウス＝平家星、青白色のリゲル＝源氏星と見た眼の確かさかと書かれ、あべこべでない平家星、源氏星が広まった。私にとって、衝撃的だったのは、香田寿男氏自身が、1960 年 2 月 16 日の『岐阜日日新聞』「奥揖斐の星」で、次のようにあべこべでの伝承内容でない野尻抱影先生をはじめ多くの天文書で書かれた形で記されてしまったことである。

「○げんじぼし

　○へいけぼし

奥美濃ではこう呼び分けております。すなわち、赤い星の方を平家の赤旗に、青白い方を源氏の白旗にみなした一対の星名であります」[7]

あべこべと正確に野尻先生に報告した和名が野尻先生をはじめあべこべでなく平家星＝ベテルギウス、源氏星＝リゲルとして普及していく現実を前に、伝承内容にもとづいてあべこべに書くことができなかった寂しさがあった。香田寿男氏も野尻先生があべこべの伝承内容よりも、平家星＝ベテルギウス、源氏星＝リゲルと見立てた眼の確かさを書かれたことの影響を受けていった。そして、多くの天文書で、「あべこべ」という伝承内容が忘れられていくこととなった。(平家星をベテルギウス、源氏星をリゲルと書いた天文書名をここで明記することは、一部故人となられた著者のことを思い、今回は保留にしたい)

6. 香田まゆみ氏から野尻先生への葉書

茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員の渡辺真由子氏は、大佛次郎記念館に野尻抱影先生宛の星の和名報告の葉書が所蔵されていると教えてくれた。その葉書を大佛次郎記念館に8月2日確認に行ったところ、香田まゆみ氏から野尻先生への葉書が所蔵されていた。そのなかで5円の葉書（1951年以降5円になった）に次のように記されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

先日の「ゲンジホシ・ヘイケボシ」の季節となりましたので、村の古老に尋ねて見ました（原文ママ）が、たしかにオリオンのαβを示すような図を炉の灰の上に羊歯（シダ）の葉柄で描いて説明してくれました。子供の時から言い馴れた名だとも云はれました。―源平の美濃合戦以来赤白＝源平の概念が深く代々の頭脳にしみこんでゐるのかもしれないと考へて見ました。揖斐郡の山村には（当村（筆者注：揖斐郡大和村、現在、揖斐川町）をはじめ）自称平氏の落人部落がいくらでもあります。(但し、説明には「右が平家星、左が源氏星」と倒錯した)

その他同じ名前をお爺さんから聞いたといふ子供も二三おりますし、当地のこの名称は山本博士の著作以前だと確信してゐます。〃ふたあり（二星）ともおっきい（大きい）人ぢや〟といったその人の言葉を忘れられません。(大佛次郎記念館所蔵「香田まゆみ氏より野尻抱影先生宛葉書」)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

上記の香田まゆみ氏より野尻抱影先生への葉書のポイントを次に記す。

・野尻抱影氏は、『日本の星』『日本星名辞典』ともに「あべこべ」と表現しているが、葉書では「但し、説明には『右が平家星、左が源氏』と倒錯した」というように、「倒錯」と表現している。

・山本一清先生の著作に平家星、源氏星と記されていることを認識しており、香田寿男氏の記録した平家星、源氏星は、山本一清先生の著作以前から伝承されていたものであると確信していると明記している。

※　　※

香田まゆみ氏が記録した「倒錯(あべこべ)」に伝承されていたことの意味を、西美濃では、「赤は源氏の色」と広く伝承されていることの意味を深く論じないで、伝承内容と異なる平家星＝ベテルギウス、源氏星＝リゲルが天文書等で広まってしまった。「倒錯（あべこべ)」の伝承を正しく伝え、平家星＝リゲル、源氏星＝ベテルギウスと明記することが、文化としての星の和名伝承の基本だと考える。

7. おわりに

和名伝承を語ったひとりひとりにとっての星という景観、伝承は、多様で豊かでそして深いものである。ひとつの星に対して、ひと

つの言葉ではなく、実に多様な言葉が伝承されていることは、天文文化の原点である。

今回は、平家星、源氏星の伝承内容について記したが、野尻先生に報告したが掲載されなかった「さむらいぼし」等、香田寿男氏から聞いた星名はまだまだある。「絵の具星」についても書かなければならないが、別の機会にしたい。

香田寿男氏との手紙のやりとりは続いた。そして、野尻先生が掲載しなかった「さむらいぼし」をはじめ、香田寿男氏から聞いた和名について本に書きますと約束した。その約束は、2018 年 5 月の拙著『日本の星名事典』で果たすことができた。香田寿男氏は病床で、嬉しそうに拙著『日本の星名事典』を読んでくださった。そして、悲しいことに 2018 年の暮れ、星空へ旅立たれた。

星の和名で最も大切なのは伝承内容である。どのような生活現場で、どのように語られていたかが重要な点である。そして、複数の伝承事例を記録していることが必要である。

しかしながら、源氏星、平家星は、残念ながら香田寿男氏以外に報告がない。山本一清先生の事例は伝承という形態でない可能性が大である、増田正之氏の事例も、本からの知識である可能性を否定できない。香田寿男氏は一つの事例でなく、「この他にも同じ名をおじいさんから聞いたという子供が二、三人おります」と明記しているので複数の事例はある。当時の子供は、今日のようにテレビの影響を受けることはなく、祖父母からの伝承を聞くことが多く、信頼できる事例と考える。しかし、残念なことに充分な数の伝承事例が平家星、源氏星にあるとは言えない。

別の機会に詳細に記したいが、鼓星、錨星のように、伝承事例が決して多くない和名が天文教育現場で使われている。オリオンなら鼓星でなく、唐鋤星とか酒桝星を使ってほしいがそのようになっていない。このような点も別の機会にまとめたい。

謝 辞

星の和名調査者から野尻抱影氏への報告の葉書、手紙が大佛次郎記念館に所蔵されていると教えてくれた茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員の渡辺真由子氏、大佛次郎記念館での葉書の調査の際にお世話になった熊谷敬子館長、安川篤子研究員、金城瑠以研究員、山本一清先生の著書に源氏星、平家星が掲載されているとご教示いただいた松岡義一氏、大佛次郎記念館での香田まゆみ先生等の葉書の調査に同行いただいた広橋勝氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。

文　献

[1] 野尻抱影（1957）『日本の星』，中央公論社，p.267.
[2] 同上，pp.267-268.
[3] 野尻抱影（1973）『日本星名辞典』，東京堂出版，pp.154-155.
[4] 野尻抱影（1955）『星三百六十五夜』，中央公論社，p.28.
[5] 山本一清（1951）「星座の親しみ」，恒星社厚生閣，pp.61-62.
[6] 増田正之（1992）『ふるさとの星―続越中の星ものがたり―』，pp.15-16.
[7] 香田寿男『奥揖斐の星』，岐阜日日新聞，1960 年 2 月 16 日，岐阜日日新聞社.

北尾 浩一

(上の写真は、宮城県気仙沼市大島にて、比嘉義裕氏撮影)